

2024年2月25日 説教「エペソでの騒動」

使徒の働き 19章 21～30節

第三回伝道旅行のエペソにおける働きはツラノの講堂で2年。福音に触れる人々が多く与えられました。神はパウロを用いて奇蹟のわざをもなさいました。それを真似した祈禱師たちは、それがかなわず逃げ出しました。エペソの人々の中には、自らをさらけ出して告白する人、魔術の高価な本をも焼き捨てる人もいて、御言葉は広がっていきました。

1. パウロのビジョン (21～22節)

①御霊の示して (21)「これらのことが一段落すると、パウロは御霊の示しにより、マケドニヤとアカヤを通ったあとでエルサレムに行くことにした。」

このような出来事が一段落して、パウロは次のステップについて願っていたようです。御霊なる神は彼に、エーゲ海の向こうのマケドニヤとアカヤを経て、エルサレムにもどることを促されました。つまり、第三次伝道旅行も残すところわずかになっていることを示されたのです。

②ローマも (21)「そして、『私はそこに行ってから、ローマも見なければならぬ』と言った。」

パウロには、その後のビジョンも示されていました。それは、ローマでの宣教でありました。帝国の首都であるローマで御言葉を語らずして、世界宣教は終わらないと導かれたのでありましよう。それを弟子たちの前でも明らかにしたのでした。

③アジアにとどまり (22)「そこで、自分に仕えている者の中からテモテとエラストのふたりをマケドニヤに送り出したが、パウロ自身は、なおしばらくアジアにとどまっていた。」

そんなことから、パウロはまずは弟子たちのなかからテモテとエラストを海向こうのマケドニヤに送り出したのです。マケドニヤについては、第二回伝道旅行でも訪問しています。ピリピ、ベレアといった地での働きでは信者も多く生まれ、教会も成長していたと思われます。

2. 訴えるデメテリオ (23～26節)

①デメテリオ (23～24)「そのころ、この道のことから、ただならぬ騒動が持ち上がった。それというのは、デメテリオという銀細工人がいて、銀でアルテミス神殿の模型を作り、職人たちにかなりの収入を得させていたが、」

さてこうしたなか、キリスト教を巡って、エペソにおいて大騒動が生じていました。銀細工人であるデメテリオは音頭をとって、銀でアルテミス神殿の模型を作り、それを配下の職人たちにも作らせていました。アルテミス神殿は広く、高さも奥行きもあって、その建物も巨大だったようです。一般の人々は、その模型はご利益をもたらすと感じさせましたから、買う人たちが大勢いたのです。その結果、職人たちは大いに儲けていたのです。



アルテミス神殿の想像図



図9. アルテミスの像。豊穡を象徴している。エペソ出土。

②繁盛の理由 (25)「**彼が、その職人たちや、同業の者たちを集めて、こう言ったからである。『皆さん、ご承知のように、私たちが繁盛しているのは、この仕事のおかげです。』**」

そこで、デメテリオは同業の者達に訴えかけたのです。皆さん、私たちが豊かな生活を送ることができるのは、銀製のアルテミス神殿模型を、私たちが作って、それがよく売れているからです。

③パウロの邪魔で (26-27)「**ところが、皆さんが見てもいるし聞いてもいるように、あのパウロが、手で作った物など神ではないと言ってエペソばかりか、ほとんどアジア全体にわたって、おおぜいの人々を説き伏せ、迷わせているのです。これでは、私たちのこの仕事も信用を失う危険があるばかりか、大女神アルテミスの神殿も顧みられなくなり、全アジア、全世界の拝むこの大女神のご威光も地に落ちてしまいそうです。」**

デメテリオの主張は続きます。「ところがですよ、皆さん。ご存じのように、あのキリスト教の宣教者パウロが、私たちが作った銀製のアルテミス神殿などは神ではないと言っているのです。それもエペソだけでなく、アジア全体で説教して人々を迷わせているのです。放っておけば、私たちは仕事を失い、信用もなくなってしまう。また、アルテミス神殿にまつられている大女神の威光も失墜してしまいます。」

3. 大騒ぎとパウロと弟子たち (28~30節)

①怒る人々 (28)「**そう聞いて、彼らは大いに怒り、『偉大なのはエペソ人のアルテミスだ』と叫び始めた。」**

デメテリオの演説を聞いた同業者たちは、同調し、大いに怒り、叫びました。その叫びはアルテミス神殿とそこで奉られている大女神の威光こそ大切なのだというところ。ところで、エペソ地域に広がっていたアルテミスという女神は、豊穰神として崇拜されていました。その像がエペソから掘り出されています(裏ページ)。

②町中が大騒ぎに (29)「**そして、町中が大騒ぎになり、人々はパウロの同行者であるマケドニヤ人ガイオとアリストアルコを捕らえ、一団となって劇場になだれ込んだ。」**

こうして、エペソの町中はこのことで大騒ぎとなりました。そして、パウロが見つからないので、同行者であるマケドニヤ人のガイオとテサロニケ出身のアリストアルコを捕らえて、つるしあげようとして、劇場になだれ込んでいったのです。大混乱です。

③制止されたパウロ (30)「**パウロはその集団の中に入って行こうとしたが、弟子たちがそうさせなかった。」**

パウロは弟子たちにかくまわれていましたが、ガイオやアリストアルコなどが捕らえられたりしましたので、何とかならないかと、集団の中に入って行こうとしたのですが、弟子たちがそれを制止しました。賢い措置であったといえるでしょう。

《結論》 今朝は土屋姉が召されてすぐの日曜日ですが、いつもと同じように学んでいます。今朝の聖書箇所から三つのことを学びたいと思います。

その第一は、パウロとそのチームは、大きさに屈せず、敢然と立ち向かったということです。つまり、女神アルテミスを崇める神殿の巨大さとそれがもたらす力というものです。その神殿はパルテノン神殿の四倍もあったということです。人間は大きさに弱いのです。言い方を換えれば、大きさに心を惹かれるのです。クリスチャンでも、いつの間にか、大きさの魔力にはまってしまうことは少なくありません。イエス・キリストが宣教生活に入られる前に、四十日四十夜の断食をした後に、サタン誘惑に遭遇します。サタンは食欲、名誉欲、大きな力への欲に働きかけてイエスにわなをかけて、自らの軍門に下らせようとしていました。しかし、主はすべて御言葉をもってこれを退かれました。世の力、大きさの誘惑に対して、イエスは「引き下がれサタン。『あなたの神である主を拝み、主にだけに仕えよ』と書いてあると退けました。エペソのアルテミス信仰は、商売とも結びついていました。銀で作られた神殿の模型がよく売れていたのです。今、私たちの教会では、祈禱会で黙示録を学んでいます。そこでは、大バビロン、大淫婦の滅び、つまりローマ帝国や反キリストが滅びていく様を読んでいます。王もそれに結び付く商売人の嘆きも記されています。今こそ、私たちも大きさにたぶらかされず、見えざる力の主なる神をあがめていきましょう。この方こそ、我らが主、我らの誇りとしていきましょう。

第二に、デメテリオという銀細工人がパウロの教えを攻撃するとき、「パウロは手で作った物など神ではない」といって伝えていると言った点についてです。計らずもデメテリオは、彼らが手で作った物を神としていると告白しているのです。しかし、エレミヤ書10章にはこのようにあります。「手で作られた神は、銀や金で飾られ、動かないように打ちつけられるけれども、それはきゅうり畑のかかしのように、ものも言えず、歩けないので、いちいち運んでやらなければならない。そんな物を恐れるな。それらがいかに巧みであっても、それらは人間が作った物。しかし、主はまことの神、生ける神、とこしえの王」といった内容です。パウロは聖書の神を明確に語っていたのです。私たちも、信ずべきは今も生きておられ、私たちを導いてくださる方であることを確認いたしましょう。

第三に、ここで町中が「アルテミスこそ崇めるべきだ!」と大騒ぎになり、ガイオやアリストアルコが捕らえられて、劇場になだれ込んでいった時に、パウロはその集団の中に入って行こうとしました。しかし、弟子たちはそうさせませんでした。私どもはここに、あのパウロ大先生が、血気にはやって危うい道に進もうとしたという弱さをみることが出来ます。しかし、ここでは弟子たちの冷静な判断が用いられました。パウロがその時に、どのように思ったかはわかりませんが、彼はコリント人への手紙第二12章で弱さについて語り、主はその弱さにこそ働いてくださると告白しています。そして、そこに主の恵みが現れると記しています(9節)。私たちも弱い存在です。小さな者達です。しかし、そこにこそ主は働いてくださることを信じ、弱さを主の前に披瀝し、そこにこそ働いてくださる、主の御力に頼っていきましょう。